

総合討論

(司会) 林 葉子
内藤 葉子
橋本 信子
秋林 こずえ

帝国による〈性の管理〉

林(司会) 総合討論を始めるにあたって、まず、この講座の趣旨の根本的なところからお話したいと思います。

〈性の管理〉については、軍隊や帝国と非常に関係が深い問題であるというのが、私たち4名全員が共有する認識でした。この連続講座の副題に、近代だけでなく「近現代史」と付けて、特に秋林さんには、現代の日本が抱える課題にも直結する話をさせていただきました。そのお話の中では、韓国において旧日本軍基地が米軍基地に転用されたというような、日本と直接的に関連のあることも紹介されました。

〈性の管理〉と帝国との関連ということでは、私がこの講座の第1回と第2回にお話した内容は日本が帝国だった時期のことが中心ですし、内藤さんは帝政期のドイツ、橋本さんもオーストリア＝ハンガリー帝国に関連する話で、直接的に“帝国”を扱っていますが、秋林さんの米軍の〈性の管理〉についてのお話は、どのように、帝国というテーマと結びついていのでしょうか？

秋林 私は「帝国」という言葉は使いませんでした。今のアメリカは「帝国」と考えていいだろうと思いますし、そういう枠組みでの議論がされてきています。他の国をアメリカがさまざまな力によって、特にアメリカの場合は軍事力を中心とした力によって、支配下におく。他の国の政治、経済、社会、文化にも支配的な力を行使するという点から考えると、今、一番大きな「帝国」であり、それを軍隊を使うことによって、維持しているのがアメリカ合衆国と考えていいと思います。私たちもそれを念頭において、米軍の駐留の問題に取り組む運動は、「脱植民地」「脱帝国」の運動であると考えています。

林 秋林さんはこれまで、沖縄のこともご研究なさっています。その沖縄についてのご研究と、今日のお話の韓国における米軍の〈性の管理〉の問題とのつながりについては、いかがですか。

秋林 私はもともと地域研究が専門ではなく、沖縄の女性たちの運動といっしょに活動して、沖縄の女性たちと米軍の駐留と性暴力について取り組むことで、研究をしてきました。私たちは「米軍の性暴力をなくすためには基地そのものをなくさないといけない、ひいては軍隊をなくさないといけない」と考えています。

韓国とのつながりは、女性同士のつながり、沖縄から基地・軍隊を許さない行動する女たちの会とトゥレバンとのつながりです。沖縄の基地をなくすことを目指す時、何が沖縄に基地を

置くことを正当化しているのか。一つは直接的な原因として朝鮮戦争があります。この有事のために軍隊を置いておかないといけない、だから基地が必要だといわれています。

この5年くらい「朝鮮戦争の終結には国際社会が取り組まないといけないのではないか」と考え、国際的な女性の運動のネットワークでも活動しています。「基地をなくす運動」と「朝鮮戦争を終結させる運動」の中で「基地村」の女性たちが声を上げてきたことに20年くらいかかわっているのでご紹介できたらと思ってお話をしました。

林 秋林さんの場合は、ご自身も社会運動に参加して、その視点から歴史を検証された貴重なお話でした。

キリスト教と廃娼運動の関係

林 この連続講座は、同志社大学人文科学研究所で私が担当している「キリスト教社会問題研究」という分野の研究活動の一環として位置づけられているのですが、ゲスト講師の皆さんのご講演の内容と「キリスト教社会問題研究」との関連について、次にお尋ねします。

日本の近代化の過程では、貧困や格差、差別など、様々な社会問題が発生したことを受けて、特にプロテスタントのキリスト教徒が中心となって社会運動が行われてきた経緯がありますが、「キリスト教社会問題研究」においては、そのようなキリ

スト教と社会問題との関連について、特に歴史研究のアプローチによって実態解明が進められてきました。ゲストの皆さんのお話の中にも、この「キリスト教社会問題研究」に関連する興味深いお話がありました。

日本の場合、キリスト教は、明治期においては一般に、まだ新しいものと受けとめられ、社会を変革していく力となって、性に関することでも、たとえば、近代的な家族のあり方についても、キリスト教徒が積極的に紹介することによって日本社会を変えていったという経緯があります。

しかし、近代化とキリスト教との関係は、内藤さんがお話されたドイツの場合などは、ずいぶん日本とは異なるのではないかと思います。キリスト教徒の社会運動の形態や廃娼運動に参加した人々の主張の内容については、かなり日本と似ているところもあるようですが、そもそも、ドイツと日本とでは、キリスト教の根つき方が全く異なるので、その点に起因する違いは、確実にあると思います。内藤さんのご講演の中では「世俗化」についてのご説明がありましたが、特に日本との違いを中心に、お話いただけますでしょうか。

内藤 日本との違いを意識して、ということですが、ドイツはヨーロッパのなかでも、今もキリスト教文化が社会の中にも根強く残っている国だと思うことはあります。19世紀はドイツだけでなく、ヨーロッパ圏で「再宗教化」が進んでいく時期です。同時にヨーロッパの覇権と植民地化の時代でもありますか

ら、「世界のキリスト教化」を伴う社会改革への動きをグローバルに生み出していました。日本のキリスト者たちが採り入れたキリスト教文化というのは、19世紀ヨーロッパの市民層を中心とした、「再宗教化」の流れの中で培われてきた価値観を受容した側面もあるのではないのでしょうか。

こうしたキリスト教的な社会改革の動きは、その価値観にあわないものに対する防波堤を作るという側面もありました。いくつか思いつくものを挙げると、一つは社会主義や共産主義に対する防波堤、もう一つは、「生物」として人間を即物的に見ていこうとする自然科学の進展に対する防波堤です。

女性の権利を主張するフェミニズムや女性運動に対しても、やはり防波堤が必要なものとみなされたといえます。たとえば、女性参政権の主張についても、刑法の堕胎罪規定に関する議論についても、宗派団体は積極的に反対にまわる勢力でした。人工妊娠中絶と女性の性的自己決定権をめぐる議論については、現在でもキリスト教的価値観の強いところでは反対にまわる傾向があると思います。

今回お話をさせていただいた19世紀末から20世紀初頭にかけては、こうしたキリスト教に基づく市民文化に対する内部批判が出てきた時代です。キリスト教と結びついた禁欲に対する批判として、性的ラディカリズムも現れてきました。とはいえ、キリスト教圏の国ですから、キリスト者の層は厚く、保守からリベラルまで広がっています。当然、その立場や意見も多様であったことは付け加えておくべきかと思います。

林 チェコスロヴァキアはドイツの隣国で、地理的にはとても近いのですが、キリスト教と社会運動との関係という点では、ドイツとチェコスロヴァキアで、どのような違いがあったのでしょうか？橋本さん、いかがですか。

橋本 先ほどの講演では、キリスト教の影響については、あまり触れませんでした。そもそも、オーストリア＝ハンガリー帝国は、神聖ローマ帝国を治めてきたハプスブルク家が統治する国ですので、カトリックへの信仰が厚い国です。ですので、カトリック系の団体が、貧困にあえぐ女性や虐待を受ける女性たちの支援、保護活動を盛んに展開していました。そうした面も過小評価してはいけなかなと思います。

ただ、後半でお話しましたチェコスロヴァキアの公娼制度の廃止に関しては、宗教色は前面に出てきていません。現在のチェコの地には、15世紀にヤン・フスという宗教改革者が現れましたが、カトリックに弾圧され、1415年、火あぶりになっています。以降、フス派は徹底的に弾圧されたので、チェコの地でプロテスタントは大きな勢力にはなりません。19世紀末以降、チェコの人たちは、宗教界の墮落に抵抗したフスとフス派の運動を、自分たちの誇るべき伝統としてとらえ直しました。初代大統領のマサリクもプロテスタントでした。けれども、宗教的な見地から女性の権利や公娼制廃止に取り組んだというわけではないと思います。

チェコについては、その後も、宗教にもとづく活動は盛んで

はありません。クリスマスを楽しむとか、教会でミサが行われるというようなことはありますが、他のヨーロッパの国々と比べて、チェコだけ異質なほど、信仰の度合いが低いです。それは、一つには、先ほどお話した、ヤン・フスの宗教改革が弾圧されて以降、宗教が下火になったことが関係しているともいわれますし、1948年以降、社会主義体制になったことで拍車がかかったともいわれます。社会主義は宗教を否定していたからです。ただ、同じ共産圏だったポーランドやリトアニアは、社会主義体制下でもカトリックの影響力が強かったですし、ポーランドでは教会が反体制活動のベースにすらなっていました。実は、1918年から1992年まで一つの国を構成していたスロヴァキアも、チェコとは違って、カトリックを信仰する人が多いです。ですので、「社会主義を経験した国だから宗教の影響力が低い」ともいえません。

2017年の調査によりますと、チェコでは、70%くらいの方が、「信仰を持っていない」「特定の宗派に属していない」と答えています。ヨーロッパの国としてはかなり特殊です。そうした背景からでしょうか、チェコでは、中絶や同性婚に寛容な人が多いです¹。

林 そのように、キリスト教と社会運動との関連を、国や地域ごとに比較しながら見ていくと、同じヨーロッパの中でも様々な違いが見られて、とても興味深いですね。

日本の場合は、社会主義とキリスト教と廃娼運動の3つは、

対立する要素にはならず、むしろ親和性が高かったと言えます。キリスト教徒であり社会主義者でもある人が廃娼運動を支持しているという例が、少なくありません。そのような日本と、キリスト教と社会主義とが対立的に捉えられることのあったドイツやチェコスロヴァキアとの違いは、どのように生じたのか、今後じっくり調べてみたいところです。

〈性の管理〉とキリスト教の関連という点で、韓国では、日本よりもキリスト教徒の割合が高いようですが、そのことが、具体的にどのような現象として現れているのでしょうか。秋林さん、いかがでしょうか。

秋林 キリスト教人口が日本より韓国が多いのは、その通りで、日本は1%以下、沖縄は1%を超えますが、韓国は20%以上だと思います。主にプロテスタントだと理解しています。

「基地村」女性の運動を支えてきたトゥレバンにしてもヘッサルにしても、キリスト教の団体です。韓国のキリスト教の人たちがみな「基地村」女性たちに対して何とかしないといけないと思っているかということ、そうではなく、韓国のプロテスタントの中でも原理的なキリスト教の運動をしたりするような人たちはLGBTQの運動に対して批判的だったりということもあります。

移動手段やメディアの進化と人身売買問題

林 性の売買のあり方と時代状況の関連については、橋本さんの話の中で、人々の移動の手段の変化、その技術的な発展が、買売春のあり方にも大きな影響を与えたというご指摘があって、その点に特に興味を引かれました。

1930年前後の日本でも、ヨーロッパ諸国の公娼制度や娼妓制度が紹介される時には、その国々で、女の子たちが海外へ人身売買のために連れ去られることを防ぐために、どのような法律が制定されているのかが、積極的に紹介されている印象があります。それだけ、海外に女の子たちが連れ去られる事件が、大きな社会問題だと考えられていたからでしょう。

国境を越えた人の移動については、人が直接、船や汽車などで移動する場合の交通手段の検証は重要ですね。加えて、そのような直接的な人の移動だけではなくて、人のイメージがメディアに載せて運ばれていくこと、具体的には、今回、写真を用いた絵葉書について紹介しましたが、絵葉書というメディアが、人のイメージを、葉書というモノに載せて世界中に郵送され、拡散されていったという現象にも、私は注目しています。当時の移動手段に関する技術的な進展やメディアの発展と性の売買との関連について、橋本さん、補足していただけますでしょうか。

橋本 19世紀後半には、ヨーロッパ中に鉄道網が網羅されてい

ます。私たちの想像以上に、たくさんの人々が鉄道などを使って、長距離を移動しています。働き手や結婚相手の募集広告が新聞や雑誌に掲載されて、女性が海を渡ってはるか遠い土地まで行くということも起こっていました。とりわけ、貧しい地域からの人の移動は非常に多いです。19世紀末から1914年にかけて、現在のポーランドから移民していった人が総計で360万人ほどいたという数字があります²。今のヨーロッパの小さな国一国分ほどの規模で人が移動しているのです。彼らは、皆が一気に家族単位で移住したわけではありません。まずは働き盛りの男性が単独でアルゼンチンなどに渡るというケースも多かったようです。そうすると、行った先は男性ばかりなので、女性が必要だということになって、女性たちを勧誘するということが起こったといわれます。

ところで、売春に携わる女性には、貧困に苦しむ地域の出身者が多く、特にユダヤ人が多かったといわれています。特に、今はポーランド領となっているガリツィアという地方は、当時非常に貧しくて、売春する女性もたくさん出たようです。また、売春を斡旋する側にもユダヤ人が多かったといわれています。もちろん、みんながみんなそうだったわけではないのですが、ユダヤ人を思わせる人物が女の子をさらうというようなイラストが流布しました。メディアの発達は、そのようなイメージを固定化し、ユダヤ人への恐怖心や憎悪を高めることに関与したと言えると思います。

逆に、警戒を促し、犯罪を抑止するためにもメディアは活用

されました。女性や子どもの人身売買を防ごうと活動する団体が、駅や、鉄道車両の中や、港などにポスターを貼ったりしています。船に乗り込んで、一人で乗船している若い女性客に声をかけたりもしたそうです。こうした活動では、女性がおおいに活躍したようです。各国の警察もネットワークをつくって、協力して捜査を展開していました。ハプスブルク帝国領内には、南部のトリエステという街に港があったのですが、そこだと帝国の捜査の手が及ぶということで、他にもいろいろなルートが使われたようです。その一つに、ドイツのハンブルクなどからアメリカ大陸に渡るルートがあったようで、ドイツの警察は目を光らせていたと本で読んだのですが、内藤さん、いかがでしょうか。

内藤 私も、このテーマを辿っているうちに、人身売買の問題が必ず出てくることに気が付きました。ドイツ語圏では、ユダヤ女性連合のベルタ・パッペンハイムという、オーストリア出身の女性が人身売買の問題に取り組んでいました。中東欧やロシア、また最貧地域のガリツィアというユダヤ人居住地域の地名がよく出てきますが、そこから集められた人たちが中継点としてのハンブルクから、パリやロンドンを経由して南米へと移動させられていました。ハンブルクは港湾都市ですが、こうした状況から、ユダヤ系団体がハンブルクで人身売買の監視をしていたという話も出てきます。イヴァン・ブロッホは『現代の性生活』という本のなかで、12歳～14歳くらいの女の子が売

買のターゲットになって、パリ、ロンドンを経てアルゼンチンまで運ばれている、この問題に対処するためにベルリンに設置された中央警察官庁は、業者のリストを作って情報交換をしているという話を書いています。これは中東欧、ドイツからアメリカ大陸におよぶ人身売買のルートですが、林さんは日本からの輸出ルートの話をされていました。それは別ルートなのか、それとも何か関連があるのか、興味があるところです。

林 日本の場合、よく知られていたのは、日本の港、たとえば長崎、神戸、横浜の港から船に乗って、まずは上海や香港へ行き、そこを経由して世界各地に移動するルートです。香港に行った後に船でシンガポールに移動して、シンガポール経由で別の国へ移動することも、多々あったようです。

満州へ移動させられる女性も多かったのですが、その場合は、北九州の港から、まずは船で朝鮮半島へ行ったり、日本海側の港から船でウラジオストクなどに行ったりするルートがあって、船で渡った後の陸地での移動手段については、日本の新聞では詳しいことは報じられていないのですけれども、大陸の奥地の辺鄙なところに日本人女性がいたというようなレポートもあるので、徒歩で長距離を移動させられた過酷なケースもあったのではないかと推測されます。

性の売買と人種差別

林 さきほどの橋本さんと内藤さんのお話の中では、ユダヤ人と娼婦のイメージが重ねられる傾向があったことに言及されましたが、その点は、とても重要です。性を売っている人たちの中に、実際にユダヤ人が多かったのだとしても、ユダヤ人と売春の関係が特に強く意識されることによって、ユダヤ人差別が強化された側面もあったのではないかと考えられます。

そのような、人種差別問題と性の売買との関連で、秋林さんにお伺いしたいのですが、今、韓国にも日本にも米軍基地があって、その基地周辺での米兵と現地の女性の間の性の売買が広く認識されているということと、アメリカ人のアジア人に対する感情には、どのような関係があるのでしょうか。

秋林 強い関連がある、とまず申し上げておきたいと思います。たくさんの米兵がアジア地域に長く駐留している。韓国に、日本に駐留して朝鮮戦争もベトナム戦争もありました。「基地村」で性売買があり、R & Rという休暇をアジアの駐留米軍は過ごす。「基地村」を作って利用していかないといけないと思った人たちの一つのモチベーションは外貨獲得です。ドキュメンタリーフィルム³で見ると、韓国で「基地村」を作った人たちは、在韓米軍の兵士たちが休暇になると沖縄に行ってしまう、沖縄にお金を落としていた、と言っています。なので、自前の性売買の場所を在韓米軍基地の周辺に作らないと外貨獲得

ができないから作らないといけなかったのだ、というようなことを言っています。そうして「基地村」が作られ、週末で休暇になるとバスで米兵たちを「基地村」に連れていくような映像もあります。

それが積み重なってアメリカ本国で何が起るのか。アジア人女性は、搾取の対象、蔑視の対象というイメージができあがっています。今、アメリカではアジア人へのヘイトが多い。暴力を振るう一つの背景、要因としてアジア女性に対する「自分たちが搾取してもいい対象、暴力を行使してもいい対象」というイメージがあります。そういうイメージができています。アジアン・ヘイトの一つの要因にはアジア地域の駐留米軍による組織化された性売買、性暴力があります。

「基地村の女性になった人は経済上の理由か、職業紹介所に騙されたのか、戻ることができなかつたのか？」という質問を頂きました。いろいろなケースがあります。職業紹介所に騙されてきた人もいますが、そうでない人もいます。自分で選んだ職業の一つとして入った人もいます。経済的な理由は大きいと思います。

今の「基地村」はフィリピン人女性が多く、韓国人女性はほとんど働いていません。1990年代前半くらいまで、冷戦構造が崩れて、まだ名残がある時までには韓国人女性で、その後、ロシア人女性が入ってくる。一時期、ロシア人女性が多く、その後フィリピン女性、1990年代初めにフィリピンの米軍基地が閉鎖され、そこから移動してきてフィリピン女性が「基地村」で働

く。しばらくロシア人の女性たちが2000年頃までいました。外国人女性たちはエンターテイナービザで入ってくるので、ある程度数はわかります。オーバステイもいるので全部わかるわけではないのですが。そのうち、ロシア人女性たちには辞めてもらおうとなって、ロシア人女性たちにエンターテイナービザを出さなくなる。そしてまたフィリピン女性たちになる。なので今はトゥレバンは「移住労働女性の人権」という支援活動をしています。そういう「移動」があります。経済的な理由でこの業界に入ってくる人が韓国の場合もフィリピンの場合も多い。

もう一つ、貧困から抜け出す手段として「基地村」にくるといふ思いの中に、米兵と結婚してアメリカに行きたいということがあります。貧困から抜け出せそうだし、自分が住む地域の家父長的な縛りからも自由になれそうだと考えるわけです。しかしアメリカのどのような社会階層の人たちが兵士となって韓国にくるか。アメリカ社会の中で軍隊に入る人たちは経済的な困窮から大学にこのままではいけない人たちが少なくありません。大学に行きたいけれど経済的に行けないので、まずは軍隊に入るという人たちです。そういう人たちと結婚してアメリカにいったとしても、またそこで買売春に携わる人たちがいます。アメリカの社会の中で韓国女性がアメリカ人と結婚してアメリカにいった場合、「基地村」女性と見られる。「売春をしていた女性」として見る価値観も、アメリカの中ではあります。背景には「軍隊」と「経済」と「移動」という影響があります。

林 そのように、軍の基地の置かれた国から来た女性であるというだけで、アメリカで「基地村」女性のイメージを重ねて見られてしまうという問題は、性の売買と人種差別に関わる普遍的な問題の一側面だと思います。

日本人女性の場合、今から120年くらい前には、海外へ行く、ただ日本人であるというだけで娼婦と見なされることがあったようです。それは当時、この連続講座の第2回でもお話しましたように、実際に海外で人身売買によって性を売らされていた日本人女性が多かったという事実が背景としてあるのですが、そのような時代には、日本人女性が海外へ行く船に乗船すると、いきなり「あなたは、いくらか？」と尋ねられたり、「ジャパン助平」と声をかけられたりして、勝手に娼婦だと見なされて嫌な気持ちにさせられたこともあったようです。当時の日本人の、自分は娼婦ではないのになぜ娼婦と見なされなければならないのかという訴えの中には、娼婦と一緒にされたくないという差別感情が混ざっていたケースもあるかとは思いますが、自分は全く性を売るつもりがないのに日本人だというだけで娼婦のラベルを貼られるのは不当だという訴えは、それ自体、正当な人種差別批判だと思います。

前借金制度と「親孝行」

林 日本の近代公娼制度の特徴としては、前借金制度、つまり、先に借金を背負って、それを娼妓として働いた稼ぎで返すとい

う仕組みになっていたことが、とても重要です。借金の形で得られた金銭は、娼妓本人ではなく親権者に渡ることが多く、親のために娘が借金を返す仕組みになっていました。

そのような制度を成り立たせていたのが、当時の人々の「親孝行」へのこだわりの強さです。困窮する親や家族を助けるために、娘が「親孝行」として身を売ることになりました。

そのような「親孝行」へのこだわりは、他の国でも見られたのでしょうか？近代公娼制度の日本的特徴を明らかにするためには、この前借金制度や「親孝行」への拘泥が鍵になると考えているのですが。

内藤 親孝行という観念を、ヨーロッパを見ていて感じることはないのですが、仕送りなどはしていたようです。仕送りをされて実家の生活が助かっているが、「醜業に就いている娘」ということで歓迎されないということはあったみたいです。キリスト教文化圏では、「聖母マリア」と墮罪の原因である「エヴァ（イブ）」に、女性を二分する見方が古くからあります。男性をセクシャルな観点から墮落させる女性＝娼婦的な存在というのは、スティグマを貼られる存在でもありましたから、「親孝行をする立派な娘」という感覚はなかったのではないかなと思います。

あと、秋林さんがお話のなかで、米兵と結婚するニーズがあると発言されていましたが、帝政期ドイツでもよく似た話がありますね。女給として働いていて、カフェやバーにやってくる

中産階級の青年と恋愛関係に入る、またそうした男性と「結婚したい」という気持ちをもつ女性たちの存在です。最初から職業的に売春を選ぶというより、いろんなプロセスの中で売春を行うようになる、また場合によっては警察に捕まり、管理下におかれてしまうというパターンも多かったのだらうと思います。

橋本 前借金制度については、明確な記述は今のところ見たことがありません。女性が一人で自活するには給料が低すぎて職業的に売春に携わったという説明が多いように思います。ただ、実際問題、女経営者が管理する娼館に住み込む形をとると、ここからはなかなか脱出できなかつたようです。標準よりも高い家賃や食事代をとられて借金がかさんでいくんです。その意味で、借金から逃げ出せないということはあったようです。

「親孝行」の概念も見かけません。家庭が貧しいとか、親に借金があって娘が売春に携わることになるということはあるようですが。でも、「母が娘を売る」「母も娘も売春をしている」という例がチラチラ出てくるのが気になっています。内藤さんがお話になっていましたが、女性が一人で婚外子を抱えて生きていくことで起こるパターンなのでしょうか。

内藤 イラストですが、母親が娘を街路に立たせて客引きをさせているというシチュエーションを描いたものを見たことがありますね。

橋本 日本では、そういうことは起こりえなかったのでしょうか。

林 日本の公娼の場合、母親が娘の娼妓稼を直接的に管理することはありません。母親も、遊廓に娘を売ることに多少関与していますが、家父長制の社会なので、父親がいる場合は、その売買の決定権は実質的に父親の方にあります。その父親も、売った後の細々したことには関与しませんでした。女衞が遊廓へ連れていった後は、遊廓の娼家が、その娘の娼妓稼を管理していました。

秋林 前借金に関してですが、パク・ヨンジャさんは、そういうシステムの中にいましたが、みんながみんなそうではないようです。家賃などで抱え主にお金を払わないといけないシステムで、それを払いきれない、生理用品も買わないといけない。外で買うのではなく、強制的に買わせることによって結果的に借りが累積していくことをやっていたところもあると思います。

「親孝行」については、家族が食べられるために自分がいく、と話しているのを見たことはあります。「基地村」に自分が行けば、ずっと高い給料をもらえる仕事があって「私がそこにいくと家族がご飯を食べられるようになるので行った」と証言した人があると聞いています。

質問に答えて

林　ここで、参加者の皆さまからお寄せいただいた質問や意見に、ゲスト講師の皆さんから回答していただきたいと思いますが、その前に、私のところに、前々回と前回にいただいていた質問にも、時間の都合で一部だけになってしまうのですが、回答します。

いただいたご質問の中には、性の売買の「当事者の声」に関するご質問が、いくつかありました。どうすれば、その「声」を正確に聴きとることができるのかという、非常に重要な問いです。私も、ずっとそのことを考え続けています。

この連続講座のチラシには、この講座の中心となる問いとして「〈性の管理〉の政策のもとで、人はどのように生きたのか？」と書きました。そしてそのように問う時に、どの「人」に焦点を当てるのが問題です。性の売買には、いろいろな立場の人が関わりますが、私が最も重視したいのは、その政策のもとで最も抑圧されている人々のことです。

ただ、性の売買の業界では莫大なお金が動くので、「これが当事者の声だ」と言われていることの中に、誰かの儲けのために無理矢理作り出された偽物の「声」が混じる可能性があります、警戒が必要です。お金儲けのための人権侵害行為を「当事者がそれでいいと言っているんだからいいだろう」と押し切るために、あるいは誰かの罪悪感をごまかすために捏造される偽物の「当事者の声」の罠に引っかけないようにしながら、本物の

「声」を探っていくというのは本当に困難な課題で、その真偽の見分けが、この問題に関わる研究者の重要な仕事の一つだと考えています。「当事者の声」と言われるものを、すべてその通りだと鵜呑みにするのも間違いですし、本物の「当事者の声」などないと最初から諦めるのも間違いだと思います。

その問いと関連し、娼妓への聞き取りがあるかどうかについて、ご質問がありました。私がこれまで読んだ本の中で、最も印象的だったのは、竹内智恵子さんの「遊女」への聞き取りの記録です。特に、『鬼追い』⁴という本には、圧倒されました。

「鬼追い」とは何かを理解するには、まず、娼婦の中でも特に蔑視されていた私娼が「地獄」と呼ばれていた事実を知る必要があります。竹内さんは、もともと遊廓にいた女性たちへの聞き取りの中で、彼女たちが、遊廓も「地獄」、娼妓の体も「地獄」と呼び、その「地獄」である女性たちの子宮に宿った胎児を「鬼」と呼んでいたことを記録しています。その「鬼」を追い払うこと、つまり墮胎することが「鬼追い」であるというわけです。そのように呼んでいたという事実からだけでも、彼女たちがどれほど過酷な苦しみの中を生きてきたのかが伝わってきますし、この本の中には、それが具体的にどのような状況だったかが記されています。

戦前の日本では性感染症が蔓延していたので、特に娼婦にさせられた女性たちは性感染症に罹る確率が高くて、その病と後遺症ゆえに、妊娠しづらい体になってしまった人が少なくありませんでした。それでも中には、意図せずに妊娠する人がいて、

墮胎させられることがありました。性交は子どもの出生と関係があるという事実について、性の売買についての議論の中では、あまり触れないことが多いのですが、私はその妊娠と不妊、出産と中絶の問題は、決定的に重要な論点だと考えています。不妊の状態だと子どもは生まれないので、性の売買と子どもの出生との関係が見えづらいのですが、女性たちが性の売買の場で性感染症の感染リスクが高い状態におかれて子どもを産めない体にさせられたことについて、子どもは生まれなくなったのだから性の売買の話と妊娠・出産・中絶の話は別ですねと切り離すのは、間違っています。性の売買が、女性の体と心を傷つけ、胎児の命を奪っていったことを、必ず一緒に考えなければならぬと思います。

廃娼運動と宗教との関係について、廃娼運動への取り組みはキリスト教以外でも見られたか、というご質問がありました。日本では、仏教徒の間でも、新仏教運動の一環としての廃娼運動への取り組みがあって、そのリーダー的存在として、高島米峰という人がいます。

ここまで、〈性の管理〉について私たちは問うてきたわけですが、「良い〈管理〉はあるのか？」ということも考えてみなければならぬと思います。私自身は、より良い〈管理〉に代替しようとするのではなく、〈管理〉を弱めていって、自由な社会を目指していくのが良いと考えていますが、そのような点も含めて、ゲストの皆さんからお話を伺いたいと思います。

内藤 報告のなかでは時間が足りず、十分に展開できなかった点の補足も含めて、お答えしようと思います。

〈性の管理〉のテーマを追っていくなかで、「管理制度とは何か」と、「管理制度を廃止するとはどういうことか」という二つの問いがあると考えました。「管理制度とは何か」という問いを考えると、管理というのはやはり軍隊と強い結びつきがあると感じています。軍隊は、男性同士の絆と武装可能な男性の身体性によって特徴づけられています。一般的に、軍事主義が強化される場所では、「男女二元論」的な言説も強化される傾向があります。「闘う男」と「守り、産む女」という「男女二元論」の言説ですね。軍事においては、兵士たる男性は勝利し、暴力によって支配する側に立つことが要請されます。当然、それは誰かを支配することと対になっています。戦争においては勝者と敗者、戦勝国と敗戦国という対比になるのですが、ジェンダーの視点からすると、支配される者は「女性」です。

ドイツ刑法第 361 条第 6 項が「女性」と「売春」を名指しで結びつけたことは、決して偶然ではないでしょう。条文は「管理売春」と「非管理売春」を分けるものでしたが、それだけではなく、「女性」と「売春」を強固に結びつけた点が重要ではないかと思います。当時の廃止主義者たち、アンナ・パブリッツやカタリーナ・シェーフェンが、この条文を「女性全体の尊厳を貶める」と批判していたのは、ジェンダーの観点からみれば本当にその通りで、一部の娼婦である女性たちだけでなく、女性全体にかかわるものでした。戦争遂行のために男性兵士に

必要とされた〈性的存在としての女性〉を管理下におくことによつて、男性中心の支配構造を支える露骨な仕組みが、売春管理制度だったのだと思います。

しかし、管理制度はドイツでも徐々に廃止されていきます。その代わりに目立ってくるのが、売春産業、性産業です。あらゆる性的欲望の充足手段を、市場が提供する仕組みが台頭してきます。これが何を意味するのかというと、「誰でも商品となりうる」ということです。つまり、「女性」と「売春」が結びつけられる必然性はなく、男性が男性を、女性が男性や女性を買ってもいい、もっといえば大人が子どもを買ってもいいということです。欲望の個人化・多様化・無定形化であり、人身売買の問題はここにつながってくるのではないかと思います。

それでは、「女性」と「売春」の必然的結びつきがなくなることは、女性たちが管理から自由になったことを意味するのでしょうか。少なくともドイツでは、娼婦たちは警察の管理下から売春産業の管理下に組換えられたといえると思います。ある意味、管理と保護は表裏一体になっているともいえて、警察の管理と保護から外れた女性たちは、あらたな保護を求めて売春産業、性産業のもとに流れこむしかなくなります。「女性」と「売春」の必然的結びつきはないとはいえ、莫大な利益を生み出す性産業に男性性は無関係だといえるのか、軍事主義とは別の形での男性中心の支配構造があるのではないかと考えざるをえません。国家による〈性の管理〉と資本による〈性の管理〉、そして報告のなかで述べた科学的知による〈性の管理〉、

ドイツの管理制度にはこの複数の管理の在り方が絡み合っていました。こうした問題は他国の状況にも現代の状況にも、共通する要素があるのではないのでしょうか。

橋本 まず、「ジョン・スチュアート・ミルにとって、ハリエット・テイラー夫人は大きな存在だと思いますが、『女性の隷従』にもテイラー夫人の影響があるのでしょうか」というご質問をいただきましたので、そちらからお答えしますと、はい、そうだと思います。ミル自身が『女性の隷従』にそのように書いています。ミルは、ハリエット・テイラー (Harriet Taylor, 1807-1858) を崇拝していましたので、過大評価もあったのではないかという研究者もいますが、ミル自身は、『女性の隷従』は、ハリエット・テイラーとの共作だといっていますね。

「良い〈管理〉はあるのか」という問題提起と関連するご質問もいただいています。「娼妓運動や女性解放運動に「終着点」はあると思われませんか」「管理売春を現代的にどのように考えられますか」という質問です。大変難しい問題だと思います。チェコスロヴァキアは、1989年に民主化を果たしたあと、国境を越えて人やお金やモノが大量に行き交うようになりました。西側諸国との競争で経済状況が悪くなり、西からの客を求めてたくさんの女性たちが売春に走るということも起こりました。そうした事態を見て、「由々しきことだ。管理しないとイケないのではないか」という議論が出てきました。そして、多くの自治体が、公序良俗の観点から風紀の取り締まりを強化する条

例をつくりました。そのような動きを見ますと、社会は一直線に進むわけではなく、社会、経済の変化によって、とりわけ体制が変わるといような大きな変動があったときには、実態や考え方や対処も行きつ戻りつすることがあるのではないかと思います。売春にあたる人たちが収奪や虐待、暴力にさらされるとか、女性を二分化して一方を差別するとか、男性が女性を支配するとかというような実態や構造は早期になくなるべきであると私自身は考えますが、実際には、ぐねぐねと曲がりくねりながら変わっていくのかなと思っています。

秋林 質問に答えながら、まとめます。一つは「日本が敗戦で引き揚げてきた時、舞鶴港で夫に帯同されていない成人女性に検査が行われ、結果次第では強制中絶が多数行われたという事実がある」というご質問で、これは最近、研究が出たものですね。さらに「これは連合軍の管理の一つなのか？」というご質問ですが、連合軍の管理なのかどうかは、私はわかりません。

「日本軍「慰安婦」問題関連で「日本軍慰安婦制度という名称を運動の中で使っていますが（「慰安婦」には）日本政府の関与があったのか？」という質問が来ています。性奴隷制度についてはすでに多くの研究の蓄積があり、「慰安婦」制度に日本軍の関与があったことは海外では常識です。日本の中では、まだ「強制的につれていかれたのか、首に縄をつけてつれていかれたのか？」などと言われたりしますが、若い方には「海外でそんなことをいったら誰も相手にしません」と言っておきた

いと思います。

国際社会では性暴力の問題、性奴隷制度、軍隊との関係では「日本軍が行ったものだ」と決着がついています。日本軍「慰安婦」制度は韓国とだけの話ではなく、アジア全般で行われた制度です。被害にあった女性たちは朝鮮半島の女性たちが多い。それは朝鮮半島が日本の植民地にされたからです。でもそれだけではなく、日本軍が展開していった所に連れていかれたり、その地域の女性が「慰安婦」にされたりしました。

「韓国での取り組み、米軍「慰安婦」の解決の取り組みが日本軍「慰安婦」の解決の取り組みに先行していたということですか？」というご質問です。決してそうではなく、日本軍「慰安婦」の問題に地道に韓国で取り組んできたことと「基地村」の問題が、やっと2008年くらいからいっしょにできるようになったと私は見えています。

「基地村」の問題はまだ難しく、朝鮮戦争がまだあり、すぐ隣に朝鮮民主主義人民共和国が、いわゆる敵国がいる状態で、米軍に依存しているという意識が強い。韓国で米軍に反対するのは本当に難しいようです。日本人の私が「米軍撤退」を要求することとは政治的な意味合いが違います。そういう文脈で考えると、「基地村」の問題は大変な思いをしている人たちが声を上げ、運動に取り組んできていることがわかります。軍隊をもつこと、「軍隊によって安全が保障される」という考え方を維持する限り、軍隊組織が男女の二元論、男性性が女性性に圧倒的に優位であること、男性性的な力の行使が容認されること

を許していくことにつながる。「基地村」の女性たちの運動が国際的なネットワークをつなげているというのは、そういう考え方から脱却しないといけないという運動でもあるということです。

林 ありがとうございます。もう一点、内藤さんからのご回答を、お願いします。

内藤 私は「帝政期のドイツからワイマール期にかけて同性愛の問題がクラフト＝エビングによって病気とされていたが、同性愛の問題がどう展開されていたのか」、という質問をいただきました。リヒャルト・フォン・クラフト＝エビングは精神病理学、とくに「性的異常」とされた人間の性行動について研究した人ですが、当時のドイツでは、刑法第175条で男性同性愛行為は処罰の対象になっていました。同時に性科学、精神医学が進展する時期です。同性愛だけでなく、フェティシズム、小児性愛、サディズム、マゾヒズムなど、ありとあらゆる性的欲望を「発見」し、正常／異常の分類を執拗に行った時期でした。しかしこの境界線はとても流動的です。精神分析学者のジークムント・フロイトは、「すべての人にあらゆる種類の性倒錯の萌芽が存在すると想定することができる」（「性理論三篇」）と述べています。同性愛は異常な病理として分類されたけれども、セクシュアリティの正常と異常の区別は流動的であるという見方からすれば、同性愛も病理であるとはかぎらないということ

になります。当時すでに、マグヌス・ヒルシュフェルトという人が刑法第 175 条に反対し、同性愛者解放運動を展開していました。彼はベルリン性科学研究所をつくって、性を科学的に研究する場を開いた人です。しかしこうした動きはすべてナチス期に破壊されて終わりました。

林 ありがとうございます。

今日の話は、現代につながる点が多く、今まさに私たち自身が問われている課題も多かったと思います。過去の歴史経験を振り返ることによって、新たに見えてきたこともあるのではないのでしょうか。

これで、連続講座「〈性の管理〉の近現代史——日本・ヨーロッパ・アメリカ」を終了いたします。ご参加くださった皆さま、ご質問やご意見をお寄せくださった皆さま、ありがとうございました。

注

- 1 アメリカの Pew Research Center の調査による。Jonathan Evans “Unlike their Central and Eastern European neighbors, most Czechs don’t believe in God” (June 19, 2017) <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2017/06/19/unlike-their-central-and-eastern-european-neighbors-most-czechs-dont-believe-in-god/> (2021年7月30日最終確認)
- 2 石井哲史朗「ポロニア、その歴史と現状」『東京外国語大学論集』第47号(1993年)。Spuscizna Polish Heritage Research Group ‘From Trickle to Tsunami : The Tidal Wave of Polish Emigrants,

1870-1914' <http://spuscizna.org/spuscizna/emigration.html> に画像あり。(2021年7月30日最終確認)

- 3 MBS (이제는 말할 수 있다 E061 030209)
- 4 竹内智恵子『鬼追い 続昭和遊女考』未来社、1990年。